

特に断らなければ  $\mathbf{u} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  とする.

1.  $L := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid |x| \leq 1, y = \pm 1\} \cup \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid x = \pm 1, |y| \leq 1\}$  とおく.

(1)  $L$  を図示せよ. また  $L$  が囲む有界領域  $\Omega$  を図示せよ.

(2)  $L$  を表すパラメータ  $\mathbf{l}: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2$  で, 周期的, 区分的に正則であり,  $\partial\Omega$  の境界の向きを表すものを一つ求めよ.

(ヒント: 4 つに区切って場合分けして定義するとよい) さらに, その周期を求めよ.

(3) (2) で定めたパラメータに対し,  $\mathbf{l}(t) \in L$  における法ベクトル  $\hat{\mathbf{n}}(t)$  を求めよ.

(4)  $\mathbb{R}^2 - \{\mathbf{0}\}$  上のベクトル場  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \frac{\mathbf{u}}{|\mathbf{u}|}$  に対し,  $\int_L \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} d\mathbf{l}$  を計算せよ.

2. 次の領域  $\Omega$  とベクトル場  $\mathbf{V}$  に対し, 境界  $L := \partial\Omega$  の向きを表す周期的な正則パラメータ  $\mathbf{l}$  を一つ求め,  $\int_L \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} d\mathbf{l}$  を計算せよ.

(1)  $\Omega := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid (x-a)^2 + (y-b)^2 < 1\}$ ,  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} x+y \\ -y \end{pmatrix}$  (2)  $\Omega := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid \frac{x^2}{4} + y^2 < 1\}$ ,  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} x+2xy \\ x-y^2 \end{pmatrix}$

(3)  $\Omega := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid 1 < |\mathbf{u}| < 2\}$ ,  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \frac{1}{|\mathbf{u}|} \begin{pmatrix} y \\ -x \end{pmatrix}$  (問題 4 も参照せよ)

3.  $L$  を正則な曲線とし,  $\mathbf{l}, \mathbf{m}$  を  $L$  を表す正則パラメータ,  $\mathbf{l}, \mathbf{m}$  に対応する法ベクトルを  $\mathbf{n}_l, \mathbf{n}_m$  とする.

(1)  $\mathbf{l}$  と  $\mathbf{m}$  が  $L$  に同じ向きを定めるとき,  $\int_L \mathbf{V} \cdot \mathbf{n}_l d\mathbf{l} = \int_m \mathbf{V} \cdot \mathbf{n}_m d\mathbf{m}$  を示せ. (教科書 p. 31 の補題 1.44 参照)

(2)  $\mathbf{l}$  と  $\mathbf{m}$  が  $L$  に逆の向きを定めるとき,  $\int_L \mathbf{V} \cdot \mathbf{n}_l d\mathbf{l}$  と  $\int_m \mathbf{V} \cdot \mathbf{n}_m d\mathbf{m}$  を比べよ.

4.  $r > 0$  に対し,  $L_r := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid |x| \leq r, y = \pm r\} \cup \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid x = \pm r, |y| \leq r\}$  とおく. 問題 1 の  $L$  は  $L_1$  である.

(1)  $L_1$  と  $L_2$  に囲まれる有界領域  $\Omega'$  を図示せよ.

(2)  $\partial\Omega'$  の向きを表すような, 周期的, 区分的に正則な  $L_1, L_2$  のパラメータ  $\mathbf{l}_1, \mathbf{l}_2$  を一つ求めよ.

(3)  $\mathbf{l}_1$  と問題 1. (2) のパラメータは  $L_1$  に同じ向きを定めるか?

(4)  $\Omega'$  の補集合  $\mathbb{R}^2 - \Omega' := \{\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2 \mid \mathbf{u} \notin \Omega'\}$  (講義では  $(\Omega')^c$  と書いた) は有界領域ではないことを示せ.

5. 曲線  $L$  の正則パラメータ  $\mathbf{l}_1, \mathbf{l}_2$  について, この二つが同じ向きを表すとき,  $\mathbf{l}_1 \approx \mathbf{l}_2$  と書くことにする.  $\approx$  は同値関係であることを示せ. すなわち, 以下のことを示せ:

(i)  $\mathbf{l} \approx \mathbf{l}$  (ii)  $\mathbf{l}_1 \approx \mathbf{l}_2$  ならば  $\mathbf{l}_2 \approx \mathbf{l}_1$  (iii)  $\mathbf{l}_1 \approx \mathbf{l}_2$  かつ  $\mathbf{l}_2 \approx \mathbf{l}_3$  ならば  $\mathbf{l}_1 \approx \mathbf{l}_3$

6.  $\Omega \subset \mathbb{R}^2$  を, 正則な閉曲線  $L_1, \dots, L_k$  で囲まれた有界領域とする. 境界  $\partial\Omega = L_1 \cup \dots \cup L_k$  の向きは, 法ベクトルが  $\Omega^c$  に向かうような向きとする, と約束した. ところで, そもそも「 $\Omega^c$  に向かう」とは (直感的には明らかだろうが) 厳密にはどのように定義したらよいか?

(提出の必要はありません)

補足. 講義で与えた線積分 (その 2) の定義 44 が, 教科書の定義 1.43 と同一のものであることを説明しておきます. 一般に正則パラメータ  $\mathbf{l}$  に対し, 法ベクトル  $\hat{\mathbf{n}}(t) := \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{pmatrix} \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t)$  の長さは  $|\hat{\mathbf{n}}(t)| = \left| \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \right| \cdots (*)$  で, これは  $t$  に依存して変化しますが, 0 にはなりません ( $\mathbf{l}$  が正則だから). よって  $\mathbf{n}(t) := |\hat{\mathbf{n}}(t)|^{-1} \hat{\mathbf{n}}(t)$  というベクトルが定義され (分母が 0 にならない),  $\mathbf{n}(t)$  は法ベクトル  $\hat{\mathbf{n}}(t)$  と同じ向きのベクトルで,  $t$  によらず  $|\mathbf{n}(t)| = 1$  です. この  $\mathbf{n}$  が教科書 28 ページの単位法ベクトルです. 「単位」というのは長さが 1 であることを指します.  $\mathbf{n}$  の定義と (\*) より  $\hat{\mathbf{n}}(t) = |\hat{\mathbf{n}}(t)| \mathbf{n}(t) = \left| \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \right| \mathbf{n}(t)$  ですから, 線積分 (その 2) は  $\int_L \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} d\mathbf{l} = \int_a^b \mathbf{V}(\mathbf{l}(t)) \cdot \hat{\mathbf{n}}(t) dt = \int_a^b \left| \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \right| \mathbf{V}(\mathbf{l}(t)) \cdot \mathbf{n}(t) dt$  と書けます. これは教科書の定義 1.43 に一致します. 具体的に計算してみるとわかりますが, 後者だと  $\left| \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \right|$  で割って  $\mathbf{n}(t)$  を求めたあと, もう一度  $\left| \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \right|$  をかけることになって二度手間なので, 講義では前者を採用しました.

補足.  $\frac{dl}{dt}(t)$  を接ベクトルと呼ぶことについて, 講義で話す時間がないので, ここで補足しておきます.

正則パラメータ  $l: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2$  で表される曲線  $L = l(\mathbb{R})$  を考えます.

定義.  $l(a) \in L$  における  $L$  の接線を

$$l(a) \text{ を通り } \frac{dl}{dt}(a) \text{ に平行な直線} \quad (*)$$

と定義する.

講義で述べたように, どんなパラメータを取っても,  $p \in L$  における接ベクトルはすべて平行です. よって  $p$  における接線は  $L$  と  $p$  だけで決まります.

今までは「接線」と言えば

$$y = f(x) \text{ のグラフの } (a, f(a)) \text{ における接線の式は } y = f'(a)(x - a) + f(a) \text{ である} \quad (**)$$

という形で出てきていたと思います. (\*) と (\*\*) は, 次に見るように同一のものです.

(1) まず,  $L$  が一変数  $C^\infty$  級関数  $f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$  のグラフである場合を考えます. このとき  $l: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2$  を

$$l(t) := \begin{pmatrix} t \\ f(t) \end{pmatrix}$$

とおくと  $l$  は  $L$  を表し,  $\frac{dl}{dt}(t) = \begin{pmatrix} 1 \\ f'(t) \end{pmatrix} \neq \mathbf{0}$  なので  $L$  の正則パラメータです.

(\*) をみたくす直線は

$$m: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2, \quad m(t) := l(a) + (t - a) \frac{dl}{dt}(a)$$

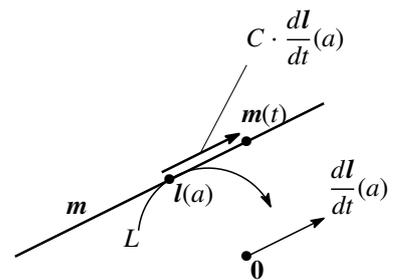
で表せます (右図で  $C = t - a$  とおいた). 成分を計算してみると

$$m(t) = \begin{pmatrix} a \\ f(a) \end{pmatrix} + (t - a) \begin{pmatrix} 1 \\ f'(a) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} t \\ f'(a)(t - a) + f(a) \end{pmatrix}$$

ですから,  $m$  は直線  $y = f'(a)(x - a) + f(a)$  を表します. これは (\*\*) と一致します.

と一致します.

少なくとも  $L$  が  $y = f(x)$  のグラフである場合, (\*) は今までよく知っていた (\*\*) の意味での「接線」に一致することがわかりました. 従って  $\frac{dl}{dt}(t)$  は (\*\*) の意味での「接線」に平行なので,  $\frac{dl}{dt}(t)$  を「接ベクトル」と呼ぶのは自然だと思えます.



(2) 一般の正則パラメータ  $l = \begin{pmatrix} l_1 \\ l_2 \end{pmatrix}$  で表される曲線  $L$  の場合, 正則性から  $l_1'(a) \neq 0$  または  $l_2'(a) \neq 0$  の少なくとも一方が成り立ちます. 例えば  $l_2'(a) \neq 0$  の場合, 逆関数定理により,  $l_2(a)$  の近くだけで定義される  $l_2$  の逆関数  $h$  が存在します.  $h$  は逆関数ですから  $l_2(h(s)) = s$  をみたくします.  $\tilde{l} := l \circ h$  も ( $l(a)$  付近では)  $L$  を表します.  $g := l_1 \circ h$  とおくと

$$\tilde{l}(s) = l(h(s)) = \begin{pmatrix} l_1(h(s)) \\ l_2(h(s)) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} g(s) \\ s \end{pmatrix}$$

ですから,  $L$  は  $l(a)$  の近くでは, ある関数  $x = g(y)$  のグラフであることがわかります. (1) と同様に,  $l(a)$  における (\*) の意味での接線は, (\*\*) の意味での  $g$  のグラフの「接線」に一致することがわかります.

なお, 接線の式 (\*\*) を  $y = f(a) + f'(a)(x - a)$  と書けば, これは  $f$  の Taylor 級数の 1 次の項までを取ったものであることに気づきます. 関数を多項式で近似するのが Taylor 級数ですが, 1 次式による近似を接線と呼ぶわけです.

幾何入門レポート問題 6 (2017 年 5 月 19 日)

担当：境 圭一

円  $x^2 + y^2 = 1$  の第一象限部分と  $x$  軸,  $y$  軸で囲まれる有界領域を  $\Omega$  とする.  $\partial\Omega$  を表す区分的に正則な周期的パラメータ  $\mathbf{l}: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2$  で,  $\Omega$  の境界の向きを表すもの一つ求めよ. この  $\mathbf{l}$  を用いて, ベクトル場  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \mathbf{u}$  に対し, 線積分  $\int_{\mathbf{l}} \mathbf{V} \cdot \mathbf{n} d\mathbf{l}$  を計算せよ. (本質的でないヒント: 円の部分を  $\mathbf{l}(t) = \begin{pmatrix} \cos(\pm\pi t/2) \\ \sin(\pm\pi t/2) \end{pmatrix}$  で表すと簡潔に記述できるかもしれない.  $\Omega$  の境界の向きを与えるには,  $\pm$  はどちらが正しいか考えよ.)

(5/26 の 3 限開始時まで提出してください)

[http://math.shinshu-u.ac.jp/~ksakai/17\\_geometry/17\\_geometry.html](http://math.shinshu-u.ac.jp/~ksakai/17_geometry/17_geometry.html)